

## 随筆 五編

歴史に学ぶ

佐藤 末喜

食料自給率目標を五十%とする農業再生計画が出た。環太平洋経済連携協定（TPP）への交渉参加問題とも絡んで、このところ農業問題に議論が多い。

野田総理は「農業をTPPでダメにするなんて絶対にできない。世界経済の流れの中で再生していく」と決意を述べているが、計画の骨子の中心をなす農家規模の大型化、新規就農者の大幅増加、農産品の六次産業化推進等はどれをとっても実現までには克服すべき課題が実に多く横たわっている。

「農は国の大本なり」という。国民の食を守る、やる気のある農業者を育成していくためには、政府の本腰を入れた取り組みを期待したい。

筆者は自給自足を目標にして無農薬・有機野菜栽培を始めて足掛け七年になる。当初は二反ほどの耕作面積であったが、耕作放棄で荒廃した農地を耕作してほしいという要望が多く、今は一町歩を越える広さになった。場所は猿で有名な高崎山の南麓、典型的な中山間地域でもとより条件の良くない土地柄であるが、昭和五十年代に耕地整備事業をした為、かつての小さな段々田がかなりの広さに

なっていて作業環境は格段に改善されている。それなのに草木竹の生い茂る荒地と化し、今や猪などの鳥獣が跋扈している現状である。実はこのような状況は二二〇年前にも起こっていた。

江戸期この地域を支配した府内藩は、寛政三年（一七九一）四カ条の農村振興策を出した。（一）男子を他領へ養子に遣和すことを禁止（二）荒廃地の多い村へ移り百姓を奨励（三）田地を分割して相続することを禁止（四）入百姓の厚遇。

さらに天保七年（一八三六）には、「村役人並村方心得覚」を発して、「近ごろ領内で人が少なくなり、村によっては手余り地が多く、年貢を村償いにし、困っている村もあるようだ。だから他所からの入百姓はその村の客と考えて、丁寧に取り扱うように。そうすれば、その村に馴染み一生居着くこととなる。人柄もよければ、村の宗門帳にくりいれよ。村の人口も増え村償いも減り、村のためになる。村の下層のものと同様の扱いをしてはならない。」と庄屋や百姓頭などの村方三役を丁寧に指導している。農業専従者の高齢化と担い手不足、耕作放棄地の増加と猪などの鳥獣被害に悩む現在の農村の事象と重なる部分が多い。まさに歴史は繰り返すである。

歴史の教訓と言えど震災は実に多くのことをわれわれに教えている。今年七月に「天災と復興の日本史」という本が刊行された。東日本大震災の被災地である宮城県亘理町出身の著者外川淳さんが、古代から関東大震災までの代表的な大地震・大噴火を取り上げ、いかにわれわれの先人達が地震、噴火、津波に耐えながら、災害を発生へのバネにして復興してきたのかを分析している。

外川さんが選んだ「日本百大天災年表」は、允恭天皇大和地震（四一六）から、今回の東日本大地震まで列挙されているが、九州関係では天武天皇筑紫地震（六七八）、慶長別府地震（一五九六）、寛文日向地震（二八六一）、島原大変（一七九二）、大正桜島噴火（一九一四）の五つが挙げられている。

これらを見ると日本列島は絶え間なく大きな地震に見舞われ続けてきたことが分かる。日本の歴史は、ある意味では地震の歴史であるともいえよう。そして三月の東日本大震災が平安時代の貞観地震（八六九年）と良く似ていると言われるように、大きな地震はある程度決まった場所から繰り返し発生していることもわかる。

ここで卑近な例として「島原大変」を取り上げてみよう。寛政四年四月一日、雲仙普賢岳が噴火し、津波、土石流、噴石、火山灰飛散により死者一五〇〇〇人に上る大災害が発生した。有明海に流れ込んだ土塊は海水を圧迫し、対岸の肥後藩の飽田・宇土・玉名三郡の海岸を襲う大津波となった。島原藩で一万余、肥後藩で約五千の命を奪った大惨事は「島原大変肥後迷惑」と呼ばれた。この惨状は島原藩家老・板倉勝彪が自ら記した「寛政大変記」や「島原大変記」によって記録にとどめられている。

普賢岳は約二百年後の平成三年に噴火活動が活発化し、六月三日火砕流が発生し四十三名の死者が出たことは、まだわれわれの記憶にあたりしいところである。

鐘ヶ江島原市長はこの災難に当たり避難勧告や指示を徹底したため、一般住民の犠牲は四名に止まり、死者の大半は報道関係者や消

防団員、警察官であった。島原大変という過去の悲惨な歴史を教訓とし、住民からの批判に耐えながら避難を徹底することにより犠牲者を最小限に抑えたこの処置は、過去の災害を歴史的教訓として生かすという点で高く評価されている。

地震や噴火という自然の巨大なエネルギーを抑制することは出来ない。地震予知の研究も日進月歩ではあるが、なお今後に期待する部分が多い。地震対策を行政に頼り切るのでなく、われわれ市民の一人ひとりが地震に対する関心を高め、自分たちの生活圏について、過去にどんな地震があつて、どんなことが起きたのかを知っておくことが、将来の地震に備えるために大切であると思われる。

## 二人の文豪

小倉に出たついでに松本清張記念館に行った。小倉城址公園の一角に立つ館は低層の瓦葺きの大屋根が連なり、静かな雰囲気を出している。入館してすぐ目に入る約七〇〇冊の著書を並べた巨大なパネルや、清張の生涯の年譜や当時のニュース映像等で構成する長さ二十二㎡の巨大な年表も迫力十分。東京・杉並の自宅を忠実に再現した、書斎・書庫・応接間などの展示物、中でもその蔵書の量に驚かされる。映画やテレビドラマになった作品の映像ホールも見ごたえがある。その日は特別企画展「眩人―松本清張と東西文化交流」をやっていた。作家としては異例の四二歳からのスタート、現

役のまま八二歳で没するまで、絶え間ない努力が天稟を開花させて清張を、戦後の日本文学の巨人たらしめた。清張の出生地を小倉とするものが多いが、彼自身は「広島で生まれ、出生届は小倉で出した」と述べている。家が貧しかったので上級学校へは行けず、高等小学校を卒業してすぐに給仕として就職、以後幾多の辛酸をなめてようやく二八歳になって朝日新聞西部本社の広告部社員になることが出来た。苦しい生活は依然として続くが、この苦難に満ちた小倉での体験が清張作品の根底にある。八歳から四四歳までを過ごした小倉は清張にとってまさに原点であるといえよう。

明治三十一年日清戦争後に新設された六師団の一つとして、小倉に第十二師団の司令部がおかれた。小倉城址公園の中に当時の正門跡があり、建物のあった付近には「第十二師団司令部跡」の碑がある。清張記念館とは目と鼻の距離である。

明治三十二年、陸軍第十二師団の軍医部長として赴任してきた森鴎外は、小倉に在住した約三年間に通称小倉日記と呼ばれる日記をつけていた。小倉日記の中には、小倉にいた時の鴎外の様子や、当時の小倉の人々の生活の様子が詳しく書かれている。また「独身」や「鶏」などの作品は、鴎外の小倉時代がモデルになっている。森鴎外といえば、東京大学医学部卒、軍医総監にまで上り詰めた超エリートであり、文学の上では夏目漱石と並び称される明治の文豪である。

学歴もなく、下積みの世界に長らく苦勞する貧しい青年にとって鴎外はまさに憧れであり高嶺の花であったろう。

清張は地元小倉を舞台に、この小倉日記の行方を探すことに生涯をささげた田上耕作という実在の人物を主人公として描いた「或る小倉日記伝」で第二八回芥川賞を受賞した。清張四二歳、昭和二八年のことである。この受賞を期に上京、しばらくは朝日新聞社に勤めながら二足のわらじを履き続けるが、井上靖に勧められて、昭和三年専業作家として歩み始めた清張にとって記念すべき作品である。エッセイや対談などを読んでみた感想であるが、清張は漱石よりも鴎外を、芥川竜之介よりも菊池寛を、より親しく関心深く見ているように筆者には思われる。

清張は森鴎外について「歴史小説を書こうとして、お手本として鴎外に関心を持ったけれども、それは鴎外の思想や文学に共感したというのではなく、その文体を好個の手本と思ったからである。偶々田上耕作のことを知って小説化したのが、別に鴎外に私淑したからというわけではない。」

と述べている。しかし清張の鴎外に対する思いはそんな淡いものではないであろうと筆者は思う。

鴎外が代表作「澁江抽斎」などの歴史小説の制作過程でみせた物事への執拗な追究の姿勢、あくまで自分で調べる態度を清張は学び、身につけたのである。清張の一番最後に出版された作品は「画像・森鴎外」である。当初は「二医官傳」という題で雑誌「文芸春秋」に七回にわたって連載されたものを加筆改題したものである。清張の長年にわたる膨大な著作の締めくくりが、鴎外の評伝であったことは単なる偶然ではない。出世作となったのは鴎外の小倉日記にか

かわる「或る小倉日記伝」であり、清張はデビューのころから鴉外を強く意識し深い関心を持ち続けていたのである。清張の研究者たちが最も疑問に思うことは、なぜ鴉外にそんなに深い関心を持ち続けたのかという点にあるらしいが、解明はされていない。ともあれまさに鴉外に始まり鴉外で終わる作家生活であったといえる。小倉という地方都市を舞台に、二人の文豪の時空を超えためぐりあいは天の配剤というべきであろう。

平成四年八月、千名を超す献花者が参列した昭和の文豪の「お別れ会」で長男陽一氏は、「ある雑誌に松本清張は天才であると書いてありました。しかし、父は天才ではなく、努力の人でした。あえて天才という言葉を使わせていただくなら、父は努力の天才であったと思います」と挨拶している。「努力の天才」とは言い得て妙である。

### ゼロの魅力

全国の書店員が一番読んでもらいたい本を投票によって決める「本屋大賞」はユニークな文学賞であるが、二十五年度は百田尚樹氏の「海賊と呼ばれた男」が選ばれた。出光興産を創業した一代の実業家出光佐三をモデルにその波乱の生涯を描く歴史経済小説であるが、著者の綿密な取材活動と膨大な文献の丹念な検証によってほぼ史実に即した、極めて感動的な作品である。

福岡県の赤間村（現・宗像市赤間）に生まれ、福岡商業から神戸高商に進み、門司で独立、大分銀行も登場するなど九州には馴染みが深い。

「日本にこのような血のたぎる男がいたのかと思うと身震いする」とコメントした書店員の気持ちがよくわかる。是非一読を薦めたい。百田尚樹氏と言えばデビュー作が「永遠の0」である。平成十八年八月の発表以後、今日までロングセラーを続けているので、読まれた方も多いと思う。

筆者は長崎にいる長男に薦められて三年前に読んだが、かなりの大作にもかかわらず、感動の連続でほとんど一気呵成に読み終えた。若い人たちにも広く読まれているらしい。

物語は宮部久蔵という凄腕のゼロ戦パイロットを主人公に、孫の姉弟が祖父の謎に満ちた人物像を戦友たちの証言によって明らかにしていく展開であるが、太平洋戦争の実情や、陸海軍における兵の命の軽視、無謀な作戦展開、銃後の人々の生活などもちりばめられていて歴史の読み物としても有益である。人気俳優で無類の読書家でもあった児玉清が、

「現代と戦争中を交錯する物語の面白さにぐいぐいと引き込まれ夢中になってしまったのだ。しかも途中、何度か心の底からこみあげてくる感動の嵐に胸は溢れ、突如うるうると涙し、本を閉じたときには、なにやらハンマーで一撃を喰らったような衝撃とともに、人間として究極とも思える尊厳と愛を貫いた男の生き様に、深々と頭を垂れ、心の中を颯と吹き抜けた清々しい一陣の風とともに美わし

い人間の存在に思いつ切り心を洗われたのだ」と最大級の賛辞を呈しているが筆者も同感である。

戦闘機乗りという過酷な状況の中で、愛する妻や娘の為に何が何でも生き残ろうとする官部の壮絶な運命との戦いに魂を揺さぶられるが、ゼロ戦の持つ高機能、戦闘能力の高さも魅力の一つである。ところで、0はゼロ戦のことだが、正式名称は三菱零式艦上戦闘機といい、正式採用になった皇紀二六〇〇年の末尾のゼロを付けた。昭和十五年のことである。ゼロ戦は格闘性能に優れ旋回と宙返りの能力がずば抜けていた。速度が速く開戦当初はおそらく世界最高速度の飛行機だった。以上のことはこの物語で初めて知った。

昨年の夏、三十五度を超す酷暑が続く七月、スタジオジブリから宮崎駿監督のアニメ映画「風立ちぬ」が公開された。前評判の良さにつられて観てきたが、不快指数を吹き飛ばす爽快な感動を覚えた。ゼロ戦の設計者として知られる三菱重工の技師堀越二郎をモデルに、その半生を描いた作品であるが、堀辰雄の小説「風立ちぬ」からの着想も巧みに織り交ぜられている。

「アニメーション映画は子どものためにつくるもの。大人のためにつくつちやいけない」と年来主張してきた宮崎監督が、実在の人物を主人公に大人向けの作品を初めて発表したのは驚きである。戦争を批判し労働運動にも積極的に参加した彼は、一方でゼロ戦という兵器に愛着を持つ、複雑な心情であったろう。

宮崎監督はゼロ戦の魅力を「ぼく自身を含め、日本のある時期に

育った少年たちが、先の戦争に対して持つ複雑なコンプレックスの集合体。そのシンボルがゼロ戦です。日本は愚かな思い上がりで戦争を起こし、東アジア全域に迷惑をかけ、焦土となった。実際の戦いでも、ミッドウエー海戦など作戦能力が低かったとは思えないような歴史しか持っていない。そんな中で『負けただけじゃなかった』と言える数少ない存在がゼロ戦です。開戦時に三三二機あったゼロ戦と、歴戦のパイロットたちは、すざましい力を持っていた」と語る。

監督は開戦の年の生まれ、たまたま筆者も同年、共鳴する所が多いコメントである。これを最後にもう長編映画はつくらないという惜しみてもあまりある引退宣言である。

この十二月「永遠の0」はイケメン俳優・岡田准一が主役の官部久蔵に扮して映画化された。ゼロ戦が登場して七十余が経つ。戦争のことも、ゼロ戦のことも知らない若者たちが、ゼロ戦を作った男と、ゼロ戦で戦った男の、この二つの感動的な作品によってどのような感想を持つのか興味深い。

サッカーは人と人を結びつける

一九一四年六月二十八日、バルカン半島のサラエボでオーストリアの皇太子夫妻を狙った銃弾が、導火線となって三七日後の八月四日、第一次世界大戦が勃発した。大正三年、桜島が大噴火した年で

ある。日本にとっては遠い戦争であったが、日英同盟を理由に連合  
国側としてドイツに宣戦布告、山東半島に上陸、青島を占領した。  
一〇〇年前のことである。

人類史上最初の世界大戦なのに、日本人の関心は低く日露戦争や  
太平洋戦争のように声高に論じられることはなかった。ベストセ  
ラー「世界史」の著者・マクニールは「第一次世界大戦は日本人に  
とって絶好の機会となった。イギリスをはじめとする西欧諸国が戦  
時体制に入ったため、ヨーロッパ製品はアジアの市場からほとんど  
姿を消してしまった。こうして日本人は繊維製品などの軽消費財を  
売りさばくためのアジア市場を手に入れたのである」と書いている。

戦後のパリ講和会議で日本はイギリス、フランス、アメリカ、イ  
タリアとともに五大国と呼ばれ列強の一角を占めたが、軍部が台頭  
し大陸戦略を推進これが太平洋戦争へと繋がっていく。第一次世界  
大戦は日本にとっても大きな転機となった。

この戦争はボルシェビキがロシア革命を起こす契機となり、戦後  
ソ連が成立二十世紀に社会主義が世界を席卷する契機ともなったよ  
うに、第一次世界大戦が現在に至る国際社会の枠組みを作ったと歴  
史家は言う。英国がユダヤ人の国家設立を支援する傍ら、アラブ人  
には独立の承認を約束したが、これがパレスチナ問題として現在に  
続いている。大戦で敗戦国となったオスマントルコ帝国が解体され  
た結果、かつての支配地であったシリア、イラクなどのアラブ地域  
は西欧列国の委任統治領となった。

民族や宗教宗派が複雑に交錯する地域を、列強の植民地主義で人

工的に分断し、國境を設定したことが今日の中東における内戦や混  
乱の遠因とされている。

ナイチンゲールが活躍したクリミア半島はロシアへの帰属を求め  
ているが、オスマン帝国、ロシア帝国からの支配を経てソ連、ウク  
ライナとめまぐるしい領有の変遷経過をもつ。ウクライナの内戦で  
マレーシア機が撃墜されるという驚愕すべき事件が起きた。われわ  
れが世界を揺るがすニュースとして新聞、テレビで見聞する中東地  
域をめぐる三つの事態は、このように一〇〇年前の第一次世界大戦  
後の国際情勢に起因しているといえよう。百年を経た今日ますます  
紛糾の度を深める中東紛争は、これからも長い時間を必要とするの  
であろう。

ところで大戦の導火線となった事件の舞台であるサラエボは、現  
在のボスニア・ヘルツェゴビナの首都であるが、このバルカン半島  
にはスラブ系、ゲルマン系、ハンガリー系、ギリシャ系、ラテン系、  
ユダヤ系、アジア系といった民族がいた。彼らは領土の拡大をめざ  
し相互対立を深めていた。「欧州の火薬庫」といわれるようにもと  
もと政情の不安な地域であった。

今回のワールドカップ・ブラジル大会に、バルカン諸国からボス  
ニア・ヘルツェゴビナが初出場した。日本代表元監督のオシムさん  
の母国である。国内に三つの民族によるサッカー連盟が鼎立し、統  
合を拒んでいたため、FIFAから追放されていた。オシムさんは  
その一本化に奔走し、国際大会にも復帰させてブラジルへの道を切  
り開いた。その活動の軌跡を、NHKスペシャル「民族共存への

キックオフ」で紹介されたので印象深く御覧になった方も多いただろう。

民族を結びつけ、対立を越えて登場した母国のチームは、一次リーグ突破は出来なかったが、イランに勝ち歴史的な初勝利を挙げた。

オシムさんは選手としても優秀なフォワードであった。一九六四年の東京オリンピックにユーゴスラビアの代表として来日、日本との順位決定戦で二ゴールを挙げている。指導者となってからも卓抜した手腕を発揮し、九〇年のイタリア大会で解体前のユーゴスラビアをベストエイトに導いている。二〇〇三年Jリーグ・ジェフユナイテッドの監督に招かれ、〇六年日本代表監督に就任、翌年惜しくも脑梗塞で倒れられ岡田武史さんと交代した。オシムさんにとっても日本にとっても大変残念なことであった。熱烈な親日家で、日本のサッカー界への提言も多い。最近の著書で「日本の代表監督は日本人であるべき。日本人のメンタリティを一番理解しているのは、日本人であり、選手もまた日本人指導者の言うことを理解する」と述べている。まさに至言というべき。今回のW杯を前にオシムさんからは「サッカーは人と人を結びつける」と語っている。ご自身の経験からの実感なのだろうが、印象的な言葉である。

国際政治の世界でも「人と人を結びつける」工夫がいまほど必要な時はないと思うのだが。

## 韓国ドラマ雑感

この夏は記録にないような多雨、豪雨が長く続き、九州各地に甚大な災害を残した。日田や耶馬溪、阿蘇の惨状をみると雨の怖さを改めて実感させられた。

農業にも被害が出た。長雨で農作業ができない、恨めしい気持ちで天を仰ぐ日々が続いた。その空白の時間に知人から借りたCDで韓国史劇「女人天下」をみた。全一五〇話、韓国三大妖婦とされるチョン・ナンジョンが、権謀術数を駆使して権力を握り没落していく一代記。それなりに面白く視聴率が高かったのも頷ける作りになっている。面白さにつられて一五〇話を一気にみた。生活のリズムが多少崩れる懸念はあったが、年寄りの時間つぶしには格好である。

福岡のTXN九州（現・TVQ九州放送）が、開局五周年を記念して一九九六年十月に三本のドラマを放映した。これが日本ではじめての韓国ドラマであった。

当初は視聴率も良くなく、一部のファンだけが見るといふ状況が続いたが、NHK総合が、二〇〇四年四月に放送した「冬のソナタ」がブームを呼び、「チャングムの誓い」が高視聴率を挙げると、その後放送する局や作品数も増え今日のような花盛りの状況を作り出した。

筆者は現在ものは殆ど見ないが、時代劇・史劇はかなりの本数を見ている。

なかでも、「朱蒙」、「風の国」「太王四神記」「淵蓋蘇文」という一連の高句麗時代の史劇に注目していた。

「朱蒙（チュモン）」は高句麗を建国した始祖・朱蒙の英雄的事蹟であり、「風の国」では高句麗三代王・大武神王（ムヒユル）を、「太王四神記」は中興の祖と言われる十九代の広開土王の活躍を、「淵蓋蘇文（ヨンゲソムン）」は高句麗朝末期の宰相、將軍で唐帝国と闘った淵蓋蘇文の生涯を題材にしている。

これらの一連のドラマは、高句麗時代に当時の韓民族が、現在の中国東北部地域で、大帝国・漢や隋、唐と闘って国家を建設し、守り抜いたというストーリー展開が共通点である。とりわけ二千余年前の建国の時期を背景とする「朱蒙」は神話と説話をもとに創作したフィクションであり想像ドラマであるが、ストーリー展開が面白く韓国では爆発的な人気を博し、日本でも高視聴率を挙げたが、中国では上海近郊での現地ロケは許しながら放送禁止とした。

韓国のテレビ局が巨費を投じて高句麗時代を題材にしたドラマを次々に制作した背景には、中国の「東北工程」という国家プロジェクトがあった。中国東北部の歴史研究を目的とするこのプロジェクトは、その研究成果として、「これまで朝鮮史として扱ってきた高句麗を中国史の地方政権」と公表し、韓民族が最も美しかった時代と誇りにしていたことを否定したのである。

これに対し韓国内で激しい抗議が発生、「中国の高句麗史歪曲対策委員会」が組織され対中国不満が高潮し、公式の抗議をしない盧武鉉政権に批判が集中した。

一連の歴史ドラマは「高句麗は韓国の歴史であること」を内外にアピールする意図をもって制作されたものであり、「朱蒙」などは「韓民族が世界の中心だった時代」などと銘打って放送され、中国への反発や抗議を助長する役割をこれらのドラマが演じた。

この問題はエスカレートして中韓間の外交問題に発展したが、「民間レベルの学術討論で解決していき、政治問題としない」との合意が交わされ一応終息した経緯がある。このことはなぜか日本のメディアがあまり報道していないので一般にはあまり知られていないようだ。

「東北工程」はチベットやウイグル問題などと同様に、多民族国家中国が領内の朝鮮族などの諸民族対策を視野に入れた深謀遠慮の政策であるとの見方もある。ともあれドラマとしては面白く作られている韓国史劇にも現実の政治が反映していることは間違いない。中国も韓国も歴史問題に関してはかなり熱い国民感情があるらしい。わが国では単なる領土問題の竹島も韓国では歴史認識の問題となつてより複雑化している。尖閣諸島も日中間の大きな政治問題になつてきたが、朝日新聞によれば「中国人の反日感情の土台には戦争があるが、戦後六七年経った現在も、抗日ドラマが量産されている」という。

中・韓の指導者はナショナリズムをいたずらに煽ることを厳に慎むべきである。わが国としては重要な隣国である両国との友好関係を第一義に、激することなく主張すべきは堂々と主張して国益を守ることが肝要であると考える。